

光の芸術が夜の街を息づかせる 光の彫刻家、ヤン・ケルサレ展開催

Jaimé
noce



Yann Kerzalis

東京タワーがライトアップされるようになって約十年。昨年には明石海峡大橋など、日本でも照明に対する関心が高まって

きている。そんな中で光の彫刻家として名高いヤン・ケルサレ展が、東京青山のギャラリー「間」で、昨年二月五日から二月二十日まで開催された。彼は従来の照明デザインの範疇を越えたアーティストとして世界的に活躍しているが、今回が初めての日本での展覧会となった。

会場は「過去」、「現在」、「未来」の三空間に分け、具体的にを見せていく。「現在」では実際に中庭で東京をイメージした作品が飾られた。展示は全体的に説明不足のためか、興味をそそるまでに至らないのが残念だったが、作品集によってフランス

の夜の街が、いかに新しく生まれ変わったかを知ることが出来る。たとえば世界的建築家ジャン・ヌーベルとのコラボレーションによるリヨンのオペラ劇場は、人々の賑わいにより薄紅色から真紅へとグラデーションをつけて屋根の色を変化させていく。オペラ終演後は、その余韻を知らせるかのように徐々に真紅の屋根となってリヨンの夜を焦がすのである。

また歴史あるナント大聖堂、プレスト市役所、レンヌのヴレーヌ川など想像を越えた夜がそこにはある。そして彼の眼は街中だけでなく、第二次世界大戦時に使用した巨大な潜水艦基地であるドックや、船が行き交う運河の水門までを捉える。彼の光を帯びたドックは舞台装置のように息づき、水門は巨大な口ポットのような姿を夜の運河に映して人々を幻想の世界へ誘う。

日本での照明の関心が高まっていても、まだ画一的ではない。しかし彼の



Yann Kerzalis

の作品は光という素材の可能性を求めた故の独創性や芸術性に溢れている。特にアメリカ、フロリダ州カナベラル岬にある、かつてのアポロ発射台などで取り組んだ宇宙に壮大な光の束を放つプロジェクト「複合施設³⁴」はまだ未完だが、十年に渡る仕事である。今回の展覧会でもその縮小版が展示されたが、このようなプロジェクトに対するフランス人の情熱を日本人はどう理解するのか。国が支援し、アートと認める意識の違い。このエネルギーは一体どこからくるのかと、考えさせられる展覧会であった。

La Lettre

DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA/Bureau de Tokyo



笹川日仏財団
ニューズレター
Vol. 3 No. 1

危機に瀕した沿岸域の 環境を考える



沿岸域の環境再生のために日仏の研究交流を図ってきた
専門家たちが「世界海洋年」を記念し、
「沿岸域生態系の再生に向けてフランスと日本の取り組み」
と題した講演会を2月5日、東京日仏会館ホールで開催。
フランスから関係者を招き、専門家、市民、行政を交えた
貴重な意見交換の場を持った。

「沿岸域の生態系の再生」と
いえば一昨年、ムツゴロウで有
名な諫早湾干潟の埋め立てで大
きなニュースになったことが思
い出される。しかしそれが身近
な問題として意識されるまでに
至っていないのが日本人一般の
現実といえるだろう。

まして干潟や藻場など水深の
浅い地域が、魚の産卵や稚魚の
成育場所として海全域の生態系
の基礎をなすほど重要な場所だ
ということを知る人は少ない。

しかし93年の環境基本法の制
定後、日本でも自然と共存する
社会を目指す動きが政策として
決定され人々の関心が高まり始
めている。特に沿岸域の環境問
題に重点が置かれ、名古屋のご
み処理場建設のための藤前干潟
の開発がストップされたことは、
今までにないことである。

「水深約30メートルまでの沿岸域
は海上交通など立地的に人間に
最も活用されやすい場所。多様
で繊細な生物の宝庫は、埋め立
てにより壊滅的な影響を受けや
すい脆さを同時に持つデリケー
トな場所でもある」

ニース大学沿岸環境研究所所
長アレクサンドル・メネーズ氏
は修復可能な自然と、修復不可
能となった損害の不可逆性をレ
ベル別に掲げること、その沿岸
環境の状況を計る目安を講演
会の最初に示した。

観光化によって 沿岸域を 荒廃させた フランス

フランスは、
すでに70年代か
ら観光化による
沿岸域の環境汚
染問題が討議さ
れ、法律の制定

や保全機構の設立などあらゆる
試みがなされてきた。その結果
ニースなどコートダジュールの
海岸は多くの海水浴客が訪れる
にもかかわらず90%の自然が回
復した。しかしモナコなど大半
の海岸線が不可逆的に破壊され
ているという。講演では、それ
ら環境破壊に対するこれまでの
取り組みの一片が発表された。

「フランス人にとって海は憧れそ
のもの。海に面したバルコニー
のあるセカンドハウスを持つの
が夢。70年代には4人に1人が
その夢を叶えたことで海岸域の
荒廃が進み、一気に環境保全意
識が高まりました」

沿岸域・湖岸域保存所顧問の
ベルナル・カラオラ氏はまた、
フランス沿岸域の再生手段の一つ
として、政府機関が海岸地帯の
土地を購入、長期的視野に立ち
海岸空間を保護する保全機構を
設立させた歴史を語った。

そしてエックスマルセイユ第2
大学シャルルフランソワ・ブド
レスク教授も海の禁漁保護区が
設置された経緯を報告した。

ただし海岸購入地もフランス
海岸線のたった8%、禁漁区に
至っては地中海全体の0.5%と、



まだ限られた地域にすぎない。
しかしこれらは「決して自然保
護団体や学者たちだけのものでは
なく、あくまで地域住民や漁
民の経済発展も含めた合意の元
に組織された点で独創的なアプ
ローチといえる。経済性を認め
ながら生態系を守るという矛盾
を孕んだ作業は非常に難しいが、
やりがいがある」と両氏。

禁漁保護区を設けたことで、
着実に漁獲量が倍増した研究結
果は漁場再生産をめざす重要な
要素にもなる。その意味からも
「保護区を100〜200m毎に
設けるのが理想だ」と付け加えた。

まだ始まった ばかりの 日本の再生への 取り組み

一方、日本か
らの報告は、最
も環境破壊が進
んでいる内湾域
の代表として大
阪湾と東京湾の

生態系の調査結果が発表されたが、この問題は決して一部だけではなく湾全体で考えるべき問題の必要性を双方が提示した。

特に東京湾では干潟の90%が埋め立てられており、最後の干潟として残る三番瀬の消失で東京湾全域の自然を失いかねない危機感がもたれている。巾着型に先がすばみ、閉鎖性の強い東京湾への影響は図り知れない。そこで立ち上がった市民活動二十一年の結果、専門家による生態系の調査委員会を千葉県が組織した。このように行政が動いて調査を実施した事例は日本では初めてだという。

「海の資源は住民が共有してこそ価値を見出すもの。開発の在り方から海と人のよりよい関わりを考える二十世紀最後の前例活動として大切に扱っていきたい」。研究者として市民活動を支援してきた東邦大学風呂田利夫助教授が決意をこめて語った。

更に瀬戸内海での環境修復技術の実用化をめざし、この二月にマリノラボ(実験室)が始動。国内初の実証実験として、広島県海田湾で行なわれる報告が、通産省中国工業技術研究所上嶋秀機海洋環境部長からあった。

海から森までを繋ぐ市民活動のネットワーク

また市民や学者だけでなく行政、企業、漁民などまでを巻き込んだ全国でもユニークな海と

森をつなぐ市民ネットワークを展開する横浜市金沢区の「海をつくる会」や「横浜自然観察の森」の取り組みが紹介された。

人口島やマリナーの造成でレクリエーション開発が進み、金沢湾の環境が悪化していく中、「海」の環境をよくするには、河川や水源の森までの流域全体を視野に考えなければならぬ」と、神奈川水産総合研究所の工藤孝

浩研究員たちが、それぞれの流域内で活動する市民団体に呼びかけてネットワーク化した。

「市民は批判から提言へ、企業は利潤追求から社会貢献へ、行政は説得から納得へ、学会は象牙の塔から実践の場へと各々が目標を持ち、それに向かってできることから始めています」

94年以降は、山から切った木で筏を組み、川を下って海へ向かう「金沢水の日」というイベントを毎年開催し、楽しい中で市民の意識に働きかけている。

自然景観も立派な文化遺産とみるフランス

日仏両国から様々な取り組みが報告された後は、各々の立場からの意見交換の場となった。

フランスの試みを知るにつけ、保全のための社会的制度確立や長期的展望のプランなど学がべき点が多いと日本人側の感想が上がった。

特に根本的な意識の違いは大きく、「自然景観も一つの立派な文化遺産。芸術品を保護するような特別な配慮を持ちたい」と述べたカラオラ氏に対して、「フランスは法律から保全機構、市民活動まで幾重にも重なった社会システムがある。それに比べて日本は海の底を守る法律すらない。実際、海の砂を買う場合の管轄は通産省、魚が住んでい



海は生きている：ニース・ドワイヤン ライオンズクラブ編集

水産庁、砂を使う場合は運輸省といった有様。環境保全で残すべきところはどこか。はっきり見定めないから、結局どこも残せない。もっと現場をきちんと見るところから始めましょう」と上嶋氏。

この熱意ある意見に会場から思わず拍手が起こったが、環境問題に対する日本側の立ち遅れを改めて認識させる機会となった。しかし横浜市金沢湾の連携した市民活動には日本だけでなくフランス関係者も興味を示した。三番瀬と同様に、彼らの活動が決して行政からのものではなく、市民の自発的な動きから発しているところに、日本でも環境問題を新しい文化として受け止める兆しがみえてくる。

後半は限られた時間の中ではあったが、意見を交わすうちに、たとえば沿岸環境は決してその部分だけではなく湾全体、ひい

ては森までを含む総合的な問題であるなど、両国共通の接点が浮かび上がってきた。それは両国を越えた、ある普遍性を持つ示唆に富んでいる。中でも特に広報活動の必要性が徐々に浸透。フランスでライオンズクラブが観光客を啓蒙するために「海は生きていく」という美しい小冊子を、8年前から海辺や近隣の学校に無料で配布していると報告されたことが、最後になって改めて思い出される講演会となったのである。

このような両国の交流の場を持ったことは、一歩前を行くフランスを知ること、大きな意味を持つことができたといえる。今や環境問題は、世界規模の問題である。これを機に、各々の立場でより密接な情報交換が持たれることを期待したい。世界の美しい海のために。





フランス人この奇妙な人たち
ボリー・プラネット
桜内篤子訳
河出書房新社

French or Foe?
そしてテーブルマナーに始まり、フランス語上達法、交通事情、スリ対策、役所の対応ま

また『フランス人』（河出書房新社、サリー・アダムソン・テイラー著）には、写真入りでコミュニケーションをとるための手振りや表情までを紹介。いずれも著者はアメリカ人で、フランスに二十一年滞在する体験を元に書いたものだが、いかにフランス人との関係をつくるまでに苦労したかを知らされる。

また『フランス人』（河出書房新社、サリー・アダムソン・テイラー著）には、写真入りでコミュニケーションをとるための手振りや表情までを紹介。いずれも著者はアメリカ人で、フランスに二十一年滞在する体験を元に書いたものだが、いかにフランス人との関係をつくるまでに苦労したかを知らされる。

A la carte

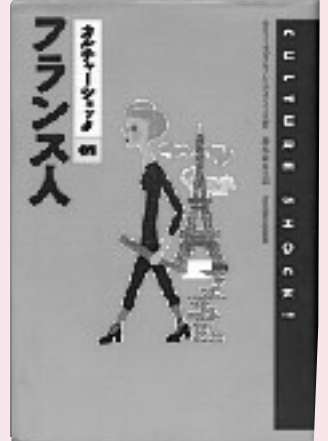
ア・ラ・カルト

フランス人は
本当に冷たいのか?
近刊書3冊より。

海外で飛行機のタラップを降りた瞬間から各々の国の文化の違いには驚かされる。しかも単なる観光ではなくビジネスで長期間住むことが多くなった現代、予想外の深刻な事態に直面せざるを得なくなったといえる。

昨春秋、出版された『フランス人、この奇妙な人たち』（TBSブリタニカ出版、ボリー・プラネット著）によると、パリで多くの日本人ビジネスマンやその家族がフランス人との人間関係によりノイローゼになる切実な問題が起こっているという。

河出書房新社刊 /
サリー・アダムソン・テイラー著 増永豪男訳



特に冒頭に、二冊ともフランス人の無礼で尊大、冷淡な態度をあげていることに文化の違いが現われている。アメリカ人には不機嫌としかみえないフランス人の無表情に彼らがどれだけ傷つき、侮辱されたと感じてきたかは新鮮に読むことができる。

フランス人は笑顔をここのほか大切にしている。そのためいいジョークや失敗したときの照れ隠しなどきちんとした理由がなければ決して笑わない。ふだんからやたらニコニコしては肝心なときに活きてこない。笑顔を安っぽいものにしていないためにも普段の無表情があるのだ。それを知れば、逆にフランス人の人間臭さや懐の深さを知ることができると三冊の本は教える。

また時間の観念の違いや不親切な店員の対応によって起こるアメリカ人の戸惑いなどの多くが日本人の私たちとまったく変わらなず、意外にも日本人とアメリカ人の共通性を認識させられる面白さを発見する本ともいえるのである。

そしてテーブルマナーに始まり、フランス語上達法、交通事情、スリ対策、役所の対応ま

Petite note

編集後記

最近日本で初めて脳死患者からの臓器移植が行われましたが、フランスでは事前に反意を示していない限り、臓器は提供されてしまうのだとか。あらためて両国の違いに驚きました。

(M)

笹川日仏財団ニュースレター

La Lettre

1999年3月発行 Vol. 3 No. 1
発行人：富永 重厚
編集人：横山 道雄
発行：笹川日仏財団
〒108-0073 東京都港区三田3-12-12
TEL：03 (3769) 6252
FAX：03 (3769) 2090
E-mail：matsugam@spf.or.jp
http://www.spf.org/ffjs/

NHKブックス刊 / 西永良成著



で役立ち情報満載。しかもフランス式経営や職場の環境などビジネスに於いての考えの違いなども含まれるため、これからフランスへ赴任するビジネスマンは、家族で回し読みできる必読の本といえる。

またフランスで生活する際、特にフランス人の議論好きを念頭においておきたい。その話題は政治、文化、社会、歴史に至るまで多岐に渡る。特に日本とフランスの関係や歴史を知っておけば鬼に金棒。その意味でお勧めするのが、『変貌するフランス』（NHKブックス刊）だ。つい三十年前の六十年代半ば、サルトル来日が熱狂的に迎えられた頃がフランス文学などの人気の最盛期だったが、それ以降日本はアメリカ

力に興味を移した。当時大学四年だったNHKテレビ「フランス語会話」講師の（一九五年）西永良成氏が、留学体験を踏まえてフランスに対する日本のイメージの変遷とフランス自体も大きく変貌したこの数十年に焦点を絞って書いたものである。

美しいフランス語の英米語化、内面的な個人主義から利己的個人主義へなど歴史や社会学の角度から説明される変貌ぶりは、決してフランスだけでなく先進国共通の問題を含んでいる。

日本人にとってフランス人を知ることが、大きな価値観の転換を迫られているこの時代だからこそ意味がある。いずれの三冊も平行して読み比べれば、一層興味を深く持つことができる近刊書だ。特に三冊共通に、しかも強調して述べられていることを最後に紹介しよう。

フランスは、どの国よりもフラストレーションの種を隠し持っているが、その高い壁を乗り越えさえすれば、この上ない喜びを与える国である。

プロジェクト・カレンダー

99年4月～6月

《京都の暑い夏'99》

（日仏タラップによる共同ワークショップ）

京都の暑い夏事務局 / 於京都

フランスのミッシェル・ケレメニス、カンパニー・ファトミラ

ムールを始め、国際的に活躍する振付家・ダンサーと国内・京都を拠点とする日本人舞踊家達

が共同でワークショップを開催するユニークなフェスティバル。

京都府が実施する「芸術祭典・京」で、演劇・造形・音楽

の多くの催しが開催され、京都の町が芸術一色に染まる時期にあえて行うことで、フランスな

どヨーロッパ型の祝祭空間の現出を目指します。

スケジュール 5月3日～6月19日
A クリエイターワークショップ
（ダンス・演劇経験者対象）
ファトゥミ・ラムル
5月3、4、5、8、9日
ミッシェル・ケレメニス
5月16、22、23、29、30日
ヤザネタケシ
5月16、22、23、29、30日
ヴィンセント・セウワティ・マントン
5月16、22、23、29、30日
ディディエ・ガフス
6月14、18日、19日

B オープンレッスン
（ダンス経験者対象）
ヴェロニク・ラルシェ
5月17、18、20、21、24、28、30日
6月1、4日
C ヒギオス・レックス
（ダンス・初心者対象）
ファトゥミ・ラムル
5月10、17日
ヴェロニク・ラルシェ
5月24、31日、6月7日